The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『松浦宮物語』における万葉歌利用
Author(s)	田島, 智子
Citation	詞林. 1994, 15, p. 38-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67347
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『松浦宮物語』における万葉歌利用

田島　智子

はじめに

無名草子が、「ひとへに万葉集の風情にて」と、評したように、万葉集がこの物語に投げかけている影は大きい。はやくに、水野治久氏が「『松浦宮物語』の成立時代と作者について」で、多数の本歌を挙げられ（1）、次いで萩谷朴氏が角川文庫において、関連歌も含めて詳細に指摘しておられる（2）。

本稿では、両氏の研究に導かれつつ、定家の万葉歌利用の方法を検討する。特に、万葉集からの直接的な摂取があったのか否か、を考えてみたい。というのも、古今和歌六帖などの歌書や綺語抄などの歌学書に引かれている万葉歌を見た、という引用による間接的摂取、または、平安後期の動きである万葉語を詠み込んだ歌に影響された、という先行歌による間接的摂取が、考え得るからである。たとえば、建久二年[一一九一年]、定家三〇歳の折の十題百首に万葉の影響が著しい、との指摘が赤羽淑氏によってなされたが（3）、久保田淳氏がさらに、「ただ、定家の場合は、影響を及ぼしたと考えられる万葉歌はすべて古今六帖にも見える作であるので、かれが万葉の古風に親しんだ径路が、直接的であったか、又は古今六帖その他を媒介としてであったかは、なお慎重な検討を要する問題であろう。」と述べておられる（4）。本稿での考察は、松浦宮物語創作当時における、定家の万葉学習の在り方を解明する、一端となるだろう。

なお、成立時期に関しては諸説があるが、もっとも幅広く、無名草子成立の下限以前、すなわち建仁二年[一二〇二年]以前ということで、論を進めてゆく。

一

一口に松浦宮物語に万葉風の和歌が多いとは言っても、その実態は様々である。万葉的な助詞や助動詞を付けることによって、万葉風を演出しているにすぎない歌もある。本稿では、万葉集からの直接的摂取の有無を特に問題とするので、それらは考察の対象から外す。引歌や本歌として、万葉歌が用いられていることが確かな例――筆者の判断では十八例（末尾〈表3〉

参照のこと）――を取り上げたい。

さらに、その十八例は、利用した万葉歌が一首か二首に特定できるもの九例と、万葉集に多数の用例があるため特定が困難なもの九例に分けられるのだが、前者の方が、摂取の経路を比較的考察しやすいので、そちらから物語の進行にそって検討してゆく。

松浦宮物語の引用は、伏見院宸翰本に拠り、適宜脱字を補い、濁点句読点を付した。掲載歌には松浦宮物語における通し番号を付している。その他は、新編国歌大観による。万葉歌の後、【　】内に、問題箇所の古点次点における訓異同を示し、［　］内に、定家以前の歌集・歌学書における所載を示している。

1おほみやの庭のしらぎく秋をへてうつろふ心人しらんかも
（弁少将）

弁少将は、菊の宴の果てた夕べ、幼い頃から思いを寄せている、神奈備皇女のもとを訪れ、挨拶代わりにこの歌を詠んで菊の枝を簾の中に差し入れる。その第五句は、平安期に例がないが、万葉集にただ一例、

巻十、冬相聞

二三五〇　窺良布跡（ウカラフト）　見山雪之（ミルヤマユキノ）　灼然（イチシロク）　恋者妹名（コヒバイモガナ）　人将知可聞（ヒトシラムカモ）

【元暦校本「ひとのしらむかも」】

［和歌童蒙抄八八「ひとのしらむか」］

という歌を見出せる。しかし、あまりにも何気ない表現であるので、この歌を意識せずとも、万葉風の終助詞を付け足すだけで詠み得るかもしれない。

〈引歌〉その名はいはじ（弁少将）

弁少将は、その夜を、神奈備皇女に胸中を訴えて過ごす。そして、空しく夜を明したことを恨む歌「5いたづらにあかせるよはのながき夜のあかつき露にぬれかゆくべき」を詠み、さらに「その名はいはじ」と語りかける。それは、

万葉巻十一、正述心緒

二五三六　吾背子我（ワガセコガ）　其名不謂跡（ソノナハイハジト）　玉切（タマキハル）　命者棄（イノチハステツ）　忘賜名（ワスレタマフナ）

という万葉歌を引いている。実は、もう一首、

二四一　百積船（モモサカフネ）　潜納八（カヅキイルヤ）　占刺（ウラサシテ）　母雖問（ハハハトフトモ）　其名不謂（ソノナハイハジ）

【嘉暦伝承本・古葉略類聚抄等に訓なし。西本願寺本等朱書】

という歌があるが、難訓歌であったようで、古点次点の段階では訓がついていない。また、神奈備皇女の返歌が、

6あか月の露のその名しもらさずは我わすれめやよろづよまでに（神奈備皇女）

とあって、第四句「われわすれめや」が「忘賜名」を念頭にお

いていると思われるので、二五三六番を引いていると見るべきであろう（5）。

いずれにしろ、これらの万葉歌は、「そのなはいはじ」の句も含めて、万葉以後、定家が松浦宮物語に用いるまで、顧みられることはなかった。万葉集を直接見たと考えてよい例である。

〈引歌〉ゆくらんわき（少将）

翌朝、弁少将は女房の女王の君を通じて、神奈備皇女に手紙を贈る。書き出しには「昨日なんゆくらんわきもはじめて思ふ給へられしかばうれしき月日なれど」と、暁の別れに際し、神奈備皇女から手ごたえのある返事をもらえたことを、喜ぶ文句が連ねられている。そこに引かれているのは、次の、

巻十一、正述心緒

二五四一　気緒尓（イキノヲニ）　妹平思念者（イモヲオモヘバ）　年月之（トシツキノ）　往覧別毛（ユクラムワキモ）　不所念鬼（オモホエヌカモ）

〔六帖二五五〇第四句「ゆくらんかたも」〕

という歌である。手紙文中の「うれしき月日なれと」も、万葉歌の「年月之」を意識しての文辞と思われる。

この歌は、古今和歌六帖にもあるが、第四句が「ゆくらんかた」である。次の、伊勢の歌、

題しらず　伊勢

年月の行くらん方もおもほえず秋のはつかに人の見ゆれば

（拾遺集九〇六）（6）

は、万葉歌の下句を用いているのだが、やはり「行くらむ方」である。平安期には「かた」で享受されていたらしい。また、管見では、松浦宮物語以外に、「ゆくらんわき」という表現は見出し得ていない。これも、定家は直接万葉集に拠った、と見てよい例である。

〈引歌〉ちへなみしきても（少将）

手紙の続きで、弁少将はとうてい遂げられぬ恋であることを「ちへなみしきてもすべなきよ」と嘆く。万葉集に、次の歌がある。

巻三、譬喩歌　大伴宿祢駿河麿歌一首

四二　一日尓波（ヒトヒニハ）　千重浪敷尓（チヘナミシキニ）　雖念（オモヘドモ）　奈何其玉之（ナドソクタマノ）　手二巻難寸（テニマキガタキ）

【類聚古集・古葉略類聚抄・以上「しきて」】

〔六帖三一八四「とへなみしきに」〕

巻十三、相聞　柿本朝臣人麿歌集歌曰

三二六七　葦原（アシハラノ）　水穂国者（ミツホノクニハ）　神在随（カミノマニ）　事挙不為国（コトアゲセヌクニ）　雖然（シカレドモ）　辞挙叙吾為（コトアゲソワガスル）　言幸（コトサキク）　真福座跡（マサキクマセト）　ツツガナク　悲無（カナシク）　福座者（サキクイマセバ）　荒磯浪（アライソナミ）　有毛見登（アリチモミムト）　百重（モヘ）　波（ナミ）　千重浪尓敷（チヘナミシキニ）　言上為吾（コトアゲスルワレ）

【元暦校本・天治本・類聚古集・以上訓なし。

西本願寺本等朱書】

三二六七番は古点次点がないので、影響関係を考えるとしたら、四一二番であろう。だが、

巻十一、

二五七　情者（コヽロニハ）千遍敷及（チヘニシクシク）雖念（オモヘドモ）使乎将遣（ツカヒヲヤラム）為便之（スベノシラナク）不知久

【嘉暦伝承本「ちへなみしきて」、古葉略類聚抄・細井本・以上「チヘニシキ〳〵」】

［六帖一〇九三「ちへにしきしき」］

という歌にも注目したい。古点本である嘉暦伝承本の訓が、「ちへなみしきて」なのである。古今和歌六帖や、古葉略類聚抄が「ちへにしきしき」、西本願寺本の墨訓が「ちへにしくしく」であるので、嘉暦伝承本の訓は、定家の時代にも特殊だったと思われる。だが、弁少将の手紙には「ちへなみしきてもすべなきよ」とあり、二五五七番歌の第五句「為便之不知久」を意識したような書きぶりである。嘉暦伝承本と定家との関係が明らかでない以上、言明はさけるべきだが、二五五七番を引歌としている可能性も捨てきれない。

この表現を取り入れている先行歌に、

月三十五首

よもすがらちへなみしきにをしめども立ちもとまらぬ山のはの月　（田多民治集二二一）

という歌があるが、物語の引歌としては万葉歌がふさわしい。

7もえにもえて恋ば人みてしりぬべきなげきをさへにそへてたくかな（弁少将）

弁少将の手紙は、さらに切切とした訴えが続き、そしてこの歌で締めくくられている。これが、次の万葉歌に基づいていることは、明らかである。

巻十一、正述心緒

二五二　色出而（イロニイデテ）恋者人見而（コヒバヒトミテ）応知（シリヌベシ）情中之（コヽロノウチノ）隠妻波母（コモリヅマハモ）

［六帖三一〇六「こひば人みてしりぬべみ」］

古今和歌六帖にも収載されている歌なので、定家がどちらを見たとは言えない。だが、定家以前にこの表現を利用した和歌はなく、定家による発見と言える。

11あらたまのすどがたけがきひまもなくへだてそふらし風もゝりこず（少将）

その後、神奈備皇女の入内が決定する。神奈備皇女の身辺には母后まで寄り添って、手紙をかよわすこともできなくなる。そのことを嘆く歌に、

巻十一、正述心緒

二五三　璞之（アラタマノ）寸戸我竹垣（スドノワガタケガキ）編目従毛（アミメヨモ）妹志所見者（イモシミエナバ）吾恋目八方（ワレコヒメヤモ）

【嘉暦伝承本・類聚古集・古葉略類聚抄・細井本・以上「すとかたけかき」】
［奥儀抄三八八・和歌初学抄九五・和歌色葉一五三・五代簡要・以上「すとかたけかき」］

という万葉歌が使われていることは、第一、二句が一致していることから明らかである。

だが、その詠み方を子細に点検すると、万葉歌以外の要素が入り込んでいることに気付く。神奈備皇女の様子も伺えないくらい監視が厳しくなったことを、「風も洩れてこない」と詠んでいるが、そのような詠み方は、万葉歌からは出てこない。実は、「すどがたけがき」と「風」を結びつける詠み方は、次のように平安末に現れたものである。

刑部卿（範兼）逆修会（長寛三年［一一六五］以前）
山家送秋
みやまべはすとかたけがきもるかぜにくれゆく秋のほどぞしらるる　（重家集二七九）

野分　左　季経
あともなくけさはのわきになりにけりしどろに見えしすどがたけがき　（六百番歌合三五三）

〈中略〉
判云、左歌、うたざまはあしからざるを、野分ばなほ野草にはななどのうへをぞ詠べきを、すどが竹がきの損失之由は存外の事にや〈後略〉

重家歌は洩れくる秋風を詠んでいる。六百番歌合では、季経が野分の題で詠み、野分の本意にふさわしくないとして負となっている。しかし、季経歌登場の背景には、秋の風と結び付ける詠み方の広がりが伺える。松浦宮物語でも、時は菊の宴のあった頃からそう過ぎておらず、秋という季節も一致する。

万葉撰取の際の、定家への影響が指摘されている俊頼にも、

山ざとにてゆふがほをみてよめる
山がつのすどがたけがき枝もせにゆふがほなれりすかひすかひに　（散木奇歌集三五四）

などの歌があるが、俊頼は秋草と取り合せているので、定家への影響は、この場合はあまり大きくないのではないか。

20たぐへける人のこゝろやかよふらむおもかげさらぬなみのうへかな（少将）

神奈備皇女が入内しときめく一方、弁少将は遣唐副使に選ばれる。唐へ向かう船上で、神奈備皇女からの餞の手紙を胸に、皇女を偲ぶ。その第四句は、

巻十一、寄物陳思
二六四一　里遠（サトドキミ）恋和備尓家里（コヒワビニケリ）　真十鏡（マソカガミ）　面影不去（オモカゲサラズ）　夢所見社（ユメニミエコソ）
【古葉略類聚抄「ヲモカケサリテ」】
［六帖三二一八］

という歌に見出すことができる。定家以前の平安期では、

題しらず　　大納言経信

故郷の花のさかりはすぎぬれどおもかげさらぬ春の空かな

（新古今一四八）

などの歌もあるが、花の面影が詠まれることが多い（7）。恋人の面影を歌う松浦宮物語は、万葉歌に基づいているとみるべきであろう。ただし、古今和歌六帖にも収載されているので、直接万葉集に拠ったとは、言い難い。

29おほ空の月にたのめしくれ待とやまのしづくに袖はぬれつゝ（少将）

唐土で弁少将は、華陽公主に出会い、心を奪われる。九月、華陽公主から二度目の伝授を受けつつある弁少将は、山陰に宿って夜を待ちこがれ、歌を詠む。その歌の「やまのしづく」は、

巻二、相聞

一〇七　足日木乃（アシヒキノ）山之四付二（ヤマノシヅクニ）妹待（イモマツ）跡　吾立所沾（ワレタチヌレヌ）山之四附二（ヤマノシヅクニ）

［六帖五八九・古来風体抄二九・五代簡要］

一〇八　吾乎待（ワレヲマツ）跡　君之沾計武（キミガヌレケム）足日木能（アシヒキノ）山之四附二（ヤマノシヅクニ）成益物乎（ナラマシモノヲ）

［六帖五九〇・古来風体抄三〇］

という歌にあり、「くれ待と」という言い回しが、「妹待跡」または「吾乎待跡」を意識していることから、これらの万葉歌を踏まえていることは間違いない。

しかし、前述11番歌の「すどがたけがき」と同じく、平安期の詠み方の反映も見られる。すなわち、「やまのしづく」と「袖」の結びつきは、

旅宿恋といへる事をよめる　　修理大夫顕季

こひしさをいもしるらめやたびねしてやまのしづくに袖ぬらすとは（金葉集二度本四八二、堀河百首一二二一）

に始まり、他にも、

治承題百首（建久七年［一一九六年］以前）初恋

あしびきのやまのしづくのかけてだにならはぬそでをたちぬらしつる（月清四五一）

順徳院名所百首（建保三年［一二一五］）、小倉山

おもひかねつまどふ鹿のねにけらし袖ぞをぐらの山のしづくに（壬二集七三六）

という歌を指摘できる、平安期特有のものである。

ところで、ここまで列挙してきた歌は、いずれも、上巻の歌であった。萩谷朴氏が指摘しておられるように、上巻後半から万葉調の歌は少なくなり、中・下巻ではほとんど現われない（8）。だが、下巻の物語も終焉に近付いた時に、次のように、再びきわめて万葉的な歌が詠まれている。

66はつせ野やゆつきが下にてる月の光を袖にまちうけて見る（華陽公主）

67思ひいる契しひけばはつせなるゆつきがしたにかげはみえけり（少将）

弁少将との契りによって、華陽公主は昇天してしまうが、約束通り、弁少将が帰国後、泊瀬で三七日の修法を行なうと、転生し再会する。その歌は、

巻十一、旋頭歌

三三七　長谷（ハツセヒヤ）弓槻下（ユツキガシタニ）吾隠在妻（ワガカクセルツマ）赤根刺（アカネサシ）所光月夜迩（テレルツキヨニ）人見点鴨（ヒトミテムカモ）

［綺語抄三七・袋草紙六九一］

という、万葉歌を踏まえている。綺語抄・袋草子に、「あかねさしてる月」の証歌として引かれているので、定家が直接万葉集を見たとは言えないが、実作に用いたのは、松浦宮物語が最初である。

ところで、松浦宮物語では、再会の場面は、「月あかきよ、山の峯に大なるつきの木のかげに、琴の声のきこゆれば、ただ一人いそぎおりて見たまふ。」と描写されているのだが、月の夜に、槻の木の下に、妻となるはずの女性、すなわち、華陽公主が立っているという状況は、万葉歌の内容そのものである。萩谷氏も、『角川文庫　松浦宮物語』補注［二九七］で、「泊瀬の弓槻の木の下で、華陽公主と再会する趣向は、むしろ、この万葉の歌からの着想であったかも知れない。」と述べておられるが、御指摘のとおりであろう。定家の万葉歌利用は、場面形成にまで関わっているのである。

二

以上、定家が利用した万葉歌がほぼ特定できる例を検討してきた。これらに特徴的な方法として、「すどが竹垣」と「風」、「山のしづく」と「袖」のように、平安期の詠み方をも取り入れていること、「はつせ野やゆつきが下」のように、万葉歌の内容を一場面に発展させていることが指摘できよう。

さて、万葉歌利用の際、定家が直接万葉集に拠ったか否か、という問題だが、〈表1〉は、ここまでの考察結果を一覧にしたものである。この中で、「そのなはいはじ」と「ゆくらんわき」は、直接万葉集に拠ったとみてよいだろう。しかし、それ以外は、引用による間接的摂取や、先行歌による間接的摂取によっても、詠み得る。

〈表1〉

	松浦宮物語	万葉集［他書の所載］	先行歌
1	人しらむかも	巻十2350	
引	その名はいはじ	巻十一2536	
引	ゆくらんわき	巻十一2541	
引	ちへなみ	巻三412	田多民治
	しきても	巻十一2557（嘉暦本訓）	221
7	恋ば人みて	巻十一2571［六帖3106］	

	しりぬべき		
11	あらたまの すどがたけがき	巻十一 2535 ［奥儀388・和歌初95・色葉153］	重家279 六百番353
20	おもかげさらぬ	巻十一 2642［六帖3228］	
29	やまのしづく	巻二 1107［六帖589・古来風29］ 巻二 1108［六帖590・古来風30］	金葉2482 月清451
66	はつせ野や ゆつきが下	巻十一 2357［綺語37・袋691］	

だが、ここで一つの事実に気付く。それは、万葉歌の所載が巻十一に集中しているということである。嘉暦伝承本の訓が注目された「ちへなみしきて」の例も含めると、九例中七例までが、巻十一という集中ぶりである。これだけ集中しているということは、少なくとも万葉集巻十一は、直接閲覧し参考にしたと考えてよいのではないだろうか。

このような、巻十一との関連が、利用した万葉歌の特定が困難だった例の中に、多少なりとも見られないかを検討してみるに、次の様なものを挙げることができる。

3 こひしなば恋もしぬべき月日へていかに物おもふ我身とかしる（弁少将）

菊の宴の後、神奈備皇女のもとを訪れた弁少将は、夜も更けた頃、隙を見て皇女の手をとらえ、この歌を詠みかける。その上句は、巻十一の二首と一致する。

巻十一、正述心緒

三三七四　恋死（コヒシナバ）　恋死耶（コヒシネトヤ）　玉桙（タマホコノ）　路行人（ミチユキビトニ）　事告（コトモツゲケム）兼

【嘉暦伝承本「も」なし】

［六帖一九九七・拾遺集九三七・人麿集二〇四「こひしとかこひもしねとか」・定家八代抄一三三八］

二四〇五　恋死（コヒシナバ）　恋死哉（コヒシネトヤ）　我妹（ワギモコガ）　吾家門（ワギヘノカドヲ）　過行（スギヤユクラム）

［拾遺集九三六「こひてしねこひてしねとや」］

ただし、巻十五に、

三八〇三　古非之奈婆（コヒシナバ）　古非毛之祢等也（コヒモシネトヤ）　保等登芸須（ホトトギス）　毛能毛布（モノモフ）

等伎尓（トキニ）　伎奈吉等余牟流（キナキトヨムル）

右七首中臣朝臣宅守寄花鳥陳思作歌　［能因歌枕二五］

という歌があり、平安期にも、

讃岐院の百首のなかの恋歌

こひしなば恋もしねとやおもふらんあはばあふべきほどのすぎぬる　（教長集七〇九・久安百首二六五）

という歌があるので、残念ながら巻十一歌に特定できない。

10 山のはをいでつる月のすむ空のむなしくなりぬ我こふらくは（少将）

神奈備皇女の入内決定後、弁少将は月を眺めて嘆息し、歌を詠む。その第五句は、巻十一に、

二七三四　白細砂（シラマナゴ）三津之黄土（ミツノハニフノ）色出而（イロニイデテ）不云耳衣（イハズテノミソ）我恋楽者（ワガコフラクハ）

［和歌童蒙抄一六〇・五代簡要一六六八］

の他、五首存在するのだが、さらに巻四・十二・十三に各二首、巻八・十・十六に各一首ある。だが、巻十一は六首という多さであり、目につきやすかったかもしれない。

14いきのをにきみが心したぐひなばちへのなみわけ身をもなぐがに（弁少将）

いよいよ京を出発という日、入内し、ときめいている神奈備皇女が、こっそりと「13もろこしのちへの浪まにたぐへやる心もともにたちかへりみよ」という歌をよこす。心を旅立つ人に連れ添わせるという、餞によくある趣旨である。対する弁少将の返歌の「いきのをに」は、巻十一に、

二三六三　息緒（イキノヲニ）吾雖念（ワレハオモヘド）人目多社（ヒトメオホミコソ）吹風（フクカゼノ）有数数（アラバシシバ）応相物（アフベキモノヲ）

二五四一　気緒尓（イキノヲニ）妹乎思念者（イモヲオモヘバ）年月之（トシツキノ）往覧別毛（ユクラムワキモ）不所念鬼（オモホエルカモ）

［六帖二五五〇第四句「ゆくらんかたも」］

二七九八　生緒尓（イキノヲニ）念者苦（クヤマシクルシ）玉緒乃（タマヲノ）絶天乱名（タエテミダレナ）知者知友（シレバシルトモ）

［六帖三二一一・綺語抄494］

とあり、それ以外では、巻十二に三首、巻四・八・十三に二首、巻七・十八・十九に一首ある。だが、二五四一番が「ゆくらんわき」の引歌でもあったことに注目したい。一首の万葉歌を二通りに利用したという過程が想定できるからである。

ところで、萩谷氏が『角川文庫　松浦宮物語』の補注［五〇］で、「初句に『息の緒に』と置くのは、特に万葉的な修辞である。」と指摘しておられるように、形の上では万葉と同じである。しかし、万葉の「いきのをに」が、「おもふ」などの動詞に連なって慣用的に、「命懸けで」の意を表しているのに対し、定家歌は「に」が動作の対象を示しており、「私の命にあなたの心が連れ添うなら」という意味になっている。そこにはやはり、次のような平安後期の詠み方の反映があるだろう。

遇不逢恋　　顕仲

日にそへて思ひみだるるいきのをは今一たびも見てやたえなん

（堀河百首一二〇六）

王昭君　　顕仲

かきながすみくづになれるいきのををむすびとどむる世こそつらけれ

（永久百首六三二）

これらの歌では、「いきのを」は独立して用いられ、その後にくる助詞は一定していない。万葉集の慣用的な「いきのをに」という言回しからは、遠ざかっている。松浦宮物語での用法は、このような平安期の動きと連動したものと、理解すべきであろう。

31たまきはるいのちをけふにかぎるとも身をばおしまじきみをしぞおもふ（弁少将）

琴の伝授を終えた弁少将は、華陽公主に、この恋のためなら命も惜しくないことを涙ながらに訴える。その歌の「たまきはるいのち」は、巻十一の、

二三七八　是耳恋度玉切不知命歳経管

二三七九　吾背子我其名不謂跡玉切命者棄忘賜名

という二首に見出せる。他には、巻五・七に二首、巻四・六・八・九・十九・二十に一首と数多くある。しかし、前例14番歌「いきのをに」と同様の現象が見られる。すなわち、巻十一の二五三六番は「そのなはいはじ」の引歌でもあったのである。物語の始めの方で、引歌として用いた巻十一の万葉歌を、14番歌31番歌で再度用いて、効率よく創作していったのではあるまいか。

以上四例は、利用した万葉歌を特定するわけにはいかないが、定家が巻十一の歌を見たとすれば説明しやすいものである。

おわりに

このように、松浦宮物語を創作する上で、巻十一はかなり重要な位置を占めていることが判明した。だが、それは物語全体では、どの程度の割合なのだろうか。本稿末尾に付している〈表3〉は、前述の例も含めて、万葉歌を利用していることが明らかな例を一覧にしたものである。なお、万葉集に同じ表現があったり、水野治久氏や萩谷朴氏が万葉歌との関連を指摘しておられても（注1、2）、筆者が平安期の一般的な詠み方によって詠み得ると判断したものは除外して、〈表4〉に理由とともに列挙している。

さて、〈表3〉では、本稿で指摘してきた、巻十一と多少とも関連がある例に□を施している。数で言えば、十八例中、十一例と、半数を超える。しかも、利用が特定できた万葉歌にかぎれば、九例中七例という集中ぶりである。定家の利用が明らかなこれらの歌と、巻十一との関連の深さは重視すべきである。少なくとも、巻十一所載歌については、それぞれ古今和歌六帖などの歌集や歌学書に還元してゆくよりは、定家が特に巻十一を学んだと考えるべきではないだろうか。

巻十一は、本来万葉集の中でも、歌数の多い巻ではあるが、当時の歌人たちの注目度も高かったようである。次表は、万葉集巻々の歌数と、範兼の綺語抄、俊成の古来風体抄（初撰本・再撰本）、定家の五代簡要での採歌数を比較したものである。もっとも多いものに□、二番目三番目に多いものに□を付している。俊成や定家は、巻十一からもっとも多く採歌しており、範兼も巻十・巻四に次いで、取り上げている。このような、風

潮を考え合わせてみると、定家が松浦宮物語に万葉集の要素を持ち込もうとした時、まず巻十一に注目したと見てよさそうである。

〈表2〉

万葉集	綺語	古来	簡要
巻一 84	16	11	28
巻二 150	20	10	16
巻三 252	37	8	51
巻四 309	68	17	57
巻五 116	25	4	6
巻六 160	18	7	43
巻七 350	36	11	90
巻八 246	42	10	38
巻九 148	9	4	19
巻十 539	72	18	87

万葉集	綺語	古来	簡要
巻十一 497	60	22	111
巻十二 383	30	10	73
巻十三 127	6	2	8
巻十四 238	18	16	57
巻十五 208	13	3	34
巻十六 104	3	11	8
巻十七 144	12	8	13
巻十八 107	10	2	7
巻十九 154	14	12	26
巻二十 234	28	6	24

むろん、物語創作に際しての、定家の万葉摂取の在り方を、一つの経路に限定することはできまい。たとえば、風を詠み込んだ「あらたまのすどがたけがき」、袖と結びつけた「やまのしづく」、形は同じでも用い方が異なる「いきのをに」の例の詠み方は、万葉集歌だけからは出てこない。平安後期に広まった詠み方の、反映も存在する。つまり、基本的には、巻十一の直接的摂取が重点的になされ、加えて当時の詠み方に対する目配りもあったと考えるべきであろう。

松浦宮物語の成立がはっきりしない現段階では、このような万葉集への摂し方が定家の青年期のものか、中年にさしかかってのものかを云々することはできない。だが、一つの巻を集中して学ぶという態度からは、まだ万葉学習を始めて間もない頃という印象を受ける。まず、巻十一という面白そうな表現の満載された巻から、勉強を始めていったのではないだろうか。

注

(1) 水野治久氏「『松浦宮物語』の成立時代と作者について」（「国語と国文学」一七巻六号、昭和一五年六月）

(2) 萩谷朴氏『角川文庫　松浦宮物語』（昭和四五年）

(3) 赤羽淑氏「藤原定家の十題百首」（「文芸研究」四八集、昭和三九年九月）

(4) 久保田淳氏『新古今歌人の研究』（東京大学出版会、昭和四八年）第三篇第二章「新古今への道」六八七頁

(5) 萩谷氏も、『角川文庫　松浦宮物語』補注〔三三〕で、「殊に後者（＝二五三六番）を直接引用したもの。」と考えておられる。

（6）『拾遺和歌集の研究　校本篇伝本研究篇』（片桐洋一著、大学堂書店、昭和四五年）によるかぎり、異同なし。

（7）赤羽淑氏「定家における『面影』」（「ノートルダム清心女子大学紀要　国語国文学編」第六巻第一号、一九八二年）に、元来、人の顔や姿を対象にするものであった「面影」が古今以後になると、花や紅葉などにも用いられるようになるとの指摘がある。

（8）萩谷朴氏「松浦宮物語は定家の実験小説か」（「国語と国文学」四六巻八号、昭和四四年八月）

（たじま・ともこ　四天王寺国際仏教大学）

〈表3〉は、松浦宮物語中の万葉的な表現について、関連する万葉歌と、その表現を用いた作例を定家とほぼ同時期以前の範囲で列挙したものである。［　］内に、他出も示している。甚だしく略号を使用した書名は、次の通り。

【勅撰集】拾遺（拾遺集）【私撰集】六帖（古今和歌六帖）【歌合】六百番（六百番歌合）和影八（和歌所影供歌合　建仁元年八月）【歌学書】能因（能因歌枕）童蒙（和歌童蒙抄）和歌初（和歌初学抄）袋（袋草子）人麻勘（柿本人麻呂勘文）六百陳（六百番陳状）古来風（古来風体抄）定家八（定家八代抄）五代枕（五代集歌枕）五代簡（五代簡要）歌色葉（和歌色葉）【物語】栄花（栄花物語）狭衣（狭衣物語）【私家集】月清（秋篠月清集）拾遺愚（拾遺愚草）員外（拾遺愚草員外）

〈表3〉

	万葉歌利用表現	万葉巻十一	万葉巻十一以外	平安期の作例
1	おほみやの		巻三239［六帖1774・童蒙447］・巻十七3948・巻二十430	六帖3943・栄花95
1	人しらんかも		9［家持156・袋735］	
			巻十2350［童蒙88］	
3	こひしなば恋もしぬ	2374［六帖1997・拾遺937・人麿204・定家八1388］・2405［拾遺936］	巻十五3802［能因25］	教長709

5	あかつき露		巻二1105[五代簡]・巻八1609[五代枕693]・巻十2186[六帖579・拾遺1118・人丸123・秀歌大体57・定家八333]・2217[綺語709]	狭衣101・千載240(崇徳院)[久安百240・定家八301]・行宗218・林下213・清輔歌合39(雅重)・和影八3(良経)
引	その名はいはじ	2536・2411		
引	ゆくらんわき	2541[六帖2550]		
引	ちへなみしきても	2557(嘉暦本訓)	巻三412[六帖3184]・巻十三3267	田多民治221
7	恋ば人みてしりぬべき	2571[六帖3106]		
10	わがこふらくは	2447・2617・2718[六帖1629]・2734[童蒙160・五代枕1668・袋847]・2748・2779[童蒙551]・2535[奥儀388・和歌初95・歌色葉153・五代簡]	巻四529[六帖4459・童蒙230・五代枕1239]・763[五代枕783]・巻八1453[六帖3908・童蒙543]・巻十1907[六帖4320・赤人186]・巻十二3101[五代枕1415]・3102・3182[五代枕1136]・3210・巻十三3258[五代枕911]・3274・巻十六3870[童蒙590・五代枕779・袖中106]	人丸15[万葉2657「わがこひをらく」・六百陳68・新古今992・定家八860]・六帖1018[万葉2653「こひわたるかも」]・躬恒220
11	あらたまのすどが竹がき			散木354・413・重家279・六百番353(季経)・壬二1470
14	いきのをに	2363・2541[六帖2550]・2798[六帖3211・綺語494]	巻四647・684・巻七1364[六帖4322]・巻八1457・1511・巻十二3059・3129・3208[綺語179]・巻十三3269・3286・巻十八4149・巻十九4305[家持153]	奈良14・匡衡22・和泉89・伊大輔152[康資母104]・同153[同105]・堀河百1206(顕仲)・永久百632(顕仲)
19	いのちにまさる [行尊歌以外「むかふ」]		巻四681[六帖2002・俊頼髄239・綺語395・袖中404・五代簡]・巻八1459[綺語391・五代簡]・巻十二2895・2991	六帖2415・行尊201・六百番713(定家)・拾遺愚1375・壬二2922

20	おもかげさらぬ	2642[六帖3228]	新古今148(経信)・堀河百753・拾玉4482・拾遺愚1130・後鳥羽936・1636
21	ゆくゑしらずも		隆源口伝33(朝忠)・拾玉4340・壬二1533・2364
22	ふなのり		六百番145(顕昭)
29	やまのしづく		敦忠127・128・金葉482(顕季)[堀河百1221]・月清116・451・拾遺愚546・1307・2216・2675・員外225・383・424・壬二736・2427・新古今630(宗覚)・六帖2415[綺語392・袖中407]・堀河百1482(顕仲)・拾遺愚2821・員外487・壬二1435・1500・2922・3149・拾遺愚1125・2263・壬二1369・2498
31	たまきはるいのち	2378・2536	
66	はつせ野やゆつきが下	2357[綺語37・袋691・五代簡]	
67			

巻一167・巻二266[三十六10・童蒙443・五代枕1144・奥儀367・袋819・人麻勘48・袖中938・歌色葉136・新古今1650・定家八1648]・巻七1155[和歌初270・五代枕1531]

巻一8[袖中565]・40[人丸36・五代枕1029]・巻二326[五代枕1689]・巻七1176[和歌初258・五代枕1109]・1402[綺語244]・巻十二3216・巻十五3615[五代枕1669・古来風170]・3632[人丸57・拾遺493・人麻勘55・五代枕912・1074]・巻十七3922[家持195]・巻十九4269・巻二十405

巻二107[六帖589・古来風29・五代簡]・108[六帖590・古来風30]

巻四681[六帖2002・俊頼髄239・綺語395・袖中404・五代簡]・巻五808・909・巻六1047[袖中408]・巻八1459[綺語391・五代簡]・巻九1773[六帖2559・袖中406]・巻十七3984・3991・巻十九4235・巻二十4432

〈表4〉は、万葉歌に拠らなくても詠作しうると判断し、考察から除外したものである。

〈表 4〉

	考察より除外	関連万葉歌	除外理由
1	うつろふ心	巻十一3072・3073(類聚古集訓)	万葉歌の意味「心変わり」とは異なり、平安的な「菊がうつろふ」という詠み方により、「色に出る」の意になっている。
10	山のはをいでつる月	巻十一2465・巻十六3825	「やまのはにのぼる月」は、平安期を通じて詠まれている。
12	おほかたは	巻十二2930	古今集388・669・833・879にもあり。
6	我わすれめや	巻二110・巻七1308・巻八1486・巻九1774・巻十2247・巻十一2501	古今集723にもあり。
6	よろづよまでに	巻二196・巻七1118・1138・巻八1535・1641・巻十七3929	古今集1069・1083・1084にもあり。
9	しげきわが恋	巻十1924	古今集604にもあり。
22	かすがなるかさの山	巻七1299・巻十1891・2216・巻十二3223	古今集407がより近い。
30	たまのをのたゆ	巻二1484・巻十一2370・2797・2798・2799・2802・2837・巻十二3097	古今集667他、平安期に多数存在。
53	行ふねのあとなきかた	巻二354	古今集472がより近い。